３年生社会科通信‘22　第6号

2022/7/19

○戦争を学ぶ、戦争を知る、戦争を聞く

皆さんには第 2 次世界大戦について、教科書になぞり学習をしてもらいました。この「教科書になぞり」は、私自身は結構大切だと思っています。皆さんに紹介したように、戦争の体験は、男性・女性で、そのときの年齢で、そのときの役割で、そのときの場所で大きく変わってきます。そうした一つ一つの体験を紡ぎながら、戦争全体の実像をみるには、あまりにも多くの時間と、あまりにも多くのエネルギーを使います。

戦争に興味がある人ならともかく、この時代が苦手だという人にはあまりおすすめできません。教科書の中で戦争の全体像を学ぶということは、「どうしてこの戦争が起きたのか」「何がこの戦争のときに必要だったか」などを考える上で、非常に重要な意味を持っています。みなさんの中にも、わざわざ戦争を起こしたいと考える人はいないでしょう。

ですが、現在の国際情勢から考えても、新しい戦争が生まれる可能性はあります。どのような国が、どのような状況で、どのような理由で戦争が起きるのか、それを知るには過去に尋ねなければなりません。戦争を学ぶことは、きっと今の社会をクリアに見るよいレンズになるでしょう。

一方で、戦争について深く知ることも大切です。多様な人々の多様な経験を調べ、知り、聞いて、当時の人々の思いや感情に共感することで、今の世界がよりよく見えてくると思います。しかしこれは、教員主導で情報を集めて、皆さんに提示するような形ではうまく伝わらないと思っています。皆さんが知ったことを、周りの人に伝えていく。これが重要だと思います。

戦争についての情報は、現在も避けられることが多いです。もちろん、私たちも時・場所・状況を考慮して語らなければなりません。しかし、大人になって改めて戦争について想いを伝える場というのはあまりありません。

また、皆さんが調べてくれた調べ学習で、一つひとつの人・ものに多くの意味があることが気づいたと思います。戦時下の人も、状況は異常ですが、心の有り様は私たちと同じであり、私たちと同じように悩み、喜び、苦しみ、そして笑って過ごしていたでしょう。そんな状況の中で、人々がどのようにこの戦争に対応していったのか、「昔の人のはいていた靴に足を通して」考えてみてください。そしてもしも、中学生・高校生の皆さんには伝えたい、話しておきたいという経験者の方に合う機会があれば、避けることなく話を受け止めていって欲しいなと思います。

あなたが学校で戦争を学び、自ら訪ねて戦争を知り、顔のある人物から戦争を聞いたその経験が、今後の生活をする上で必ず大きな力になっていくはずです。

最後に、直接戦争体験が聞ける人が身近にいない場合、NHK 戦争証言アーカイブスというサイトで多くの人の戦争体験を集めてくれています。また Yahoo！の未来に残す　戦争の記憶というサイトでも、多くの記録を見ることができます。時間を取って見られるときにはぜひ、見てみて下さい。

NHK 戦争証言アーカイブス

NHK戦争証言アーカイブス　https://www2.nhk.or.jp/archives/sensou/

Yahoo！未来に残す　戦争の記憶　https://wararchive.yahoo.co.jp/

○浜松・静岡・沼津の空襲とパンプキン爆弾

静岡県内でも数多くの空襲犠牲者が出たことを皆さんは聞いたことがあるでしょうか？　浜松・静岡の二市は軍需工場があったことなどから、特に空襲の被害が大きく、三島の近くでは沼津市も市街地の大半を破壊される大規模な空襲被害にあっています。また、浜松市と焼津市、島田市の空襲ではパンプキン爆弾（一万ポンド L.C.爆弾）という原子爆弾の模擬爆弾が落とされ、原爆の落ち方や爆薬の広がり方の実証実験が行われていたことが分かっています。

渡邊英徳さんの加工写真より引用

静岡市文化財資料館より引用

Toshi Tanaka さんの写真より引用

J.WH さんの写真より引用

軍需工場を中心に焼け野原になった浜松　／　市街地が破壊し尽くされた静岡とその後集まる人　／　街の85％が消えた沼津

戦争の中で人々は何を考えていたのだろう？

〈考えていたこと〉

○戦争で社会貢献できていることが嬉しかった
○食事のことについて考えていた
○戦時中の人々は苦しい日々から抜け出すために早く戦争が終わることを祈っていた
○食事のこと。早く終わって欲しい、苦しい生活で、「明日は明日は」と思ってたのかなと思った
○戦争が早く終わって家族と一緒に腹一杯飯食えたらいいなと思っていた
○早く安全な世の中に戻って欲しいな、いつ死ぬか分からないな
○絶対に死にたくないが日本には勝ってほしいという複雑な想い
○どんどんひどくなる戦況や大切な人のことを考えていた
○国の上層部は何としても戦争に勝たなくてはと考えていた。国民は早く終わって欲しいと思っていた
○戦争にはもちろん勝ちたいと思っていただろうけれど、戦争をする意味がわからなくなった人が多いのではないかと思った
○早く終わって平和になりたい。けれど、絶対に勝利するため戦って欲しいとも思っていた
○アメリカの人も、日本の人も、植民地の人も、一日も早い終戦と平和を望んでいたと思う
○一部は日本があほらしいと思っていたが、国民のほとんどが日本最高などと国にだまされていた
○情報は政府がにぎっていたため、日本は勝っていると思い込んで、日本の勝利を考えていた
○兵隊として行けることは嬉しいことだから行くのが嫌だと言っちゃいけないし、泣くのもダメだと聞いたことがある。でも実際は行きたくなかったと思うし、怖かったと思う
○やっぱり誰しもが早く終わらせたく、戦争に行った人たちだけでなく、日本に残っている人も頑張った。明日はいい食事が食べられるだろうとか
○逆に何も考えられることはなかった。とにかく早く終わって欲しいとだけ思っていたのでは。もっと早くやめていれば、原子爆弾とか大きな被害が出ることはなかったので、なんで終わりにしなかったのだろう
○人々は辛い思いをするのが当たり前だと思っていたが、それはただ一人で思っていたのではなく、家族や友達や同じ兵隊と入った仲間がいたからやれたのだと思った。その間でも人々は心の中で早く終わらせたいと思っていたと思う
○戦争によって生活はしんどくなるし、中学生でも看護動員や工場で働くのは大変。だけど戦争が終われば、またみんなでご飯が食べられると考えた
○自分が命を落としても、家族暮らししか悲しんでくれないので、自分の価値が何なんだということ。また誰を信じればいいのか、なぜ国はこのようなことをしているのかということ

〈戦争を知って感じたこと〉

○戦争をしていく中で、人々の生活は苦しくなり「その日暮らし」だったんだろうと思いました
○また犠牲者を出すくらいならば、負けでもいいから早く終わらせたい
○東京大空襲が起こったり、原子爆弾が落とされたりしたけど、それでも人々は食事とかのことを考えていてすごいなと思った
○戦争についてたくさん知ったけど、やっぱり戦争をしていいことないし、天皇とか国家のために若い人たちがどんどん死んでいくのはどうなのかなと思う
○戦争があったことが今もこれからも絶対に忘れてはいけないし、もっといろいろな人に伝えたり、学んだりしていかないとだめだと考えました
○私たちは「戦争は良くない」という考えのもとで暮らしているけれども、当時の人からしたら戦争はあたりまえで、むしろ良いことまで思っていたんだろうなと思った。だから敗戦が決まったときの喪失感ははかりしれないと思う
○負けたくないという気持ちが、こんな残酷な戦争を引き起こしてしまった。ちゃんとした判断ができていれば、負けを認めるという選択もできたのではないか
○政府は何としてでも勝たないといけないため焦っており、非常にまずい状況でも、国民に勝っていると伝えないと兵が増えないので、ある意味どうしようもなかった
○日本が劣勢だと気づきそうな人物や記録を排除し、日本は優勢であると国民に信じさせていたため、「いずれ勝つ国のために美しく死ねる」と思っていた
○総力戦での戦争が長引き、兵隊がすくなくなって学徒出陣が始まるため、子どもは働かなくちゃいけないし、男の人は死にに行かなきゃならないから、そんなの嫌だって思うし、怖いし、早く戦争が終わって欲しいと思います。
○目的がはっきりしていなかった戦争では、兵士が足らなくなり、学徒出陣を行った。新聞などのメディアでは、嘘のことが書かれていたり、国民の繊維が落ちないように工夫がされたりした。同盟国のイタリアやドイツは、早く降伏をしていたが、日本は降伏せず、敗戦する厳しい戦いになった。

３年生社会科通信‘22　第7号

2022/7/19

○自分目線で戦争を知る

　みなさんは、戦争のことを思い出すときはどんなときでしょうか？　一番は家のテレビで、戦争の特集をやるときだと思います。毎年 8 月になると、「火垂るの墓」や「風立ちぬ」などの戦争にかかわるアニメなどが放映されます。人間の知識にも鮮度があります。今年学習したものは、今年の内は心に響くものがありますが、5 年後 10 年後だとなかなか強い想いで接することはないと思います。

　日本は、毎年「戦後○○年」が大事にされるほど、アジア・太平洋戦争の経験が大切にされています。そのため、全国各地に戦争を記憶するための記念館・資料館があります。このほかにも、戦艦や特攻隊など各種テーマに応じて日本にはいくつもの戦争ミュージアムがあります。こうした博物館が充実しているのも、「日本では二度と無謀な戦争をしない」という人々の誓いが込められているからだと思います。

　皆さんには、学校という場所だけでなく、メディアや資料館を通じて、ぜひ様々な角度から戦争について学んでいって欲しいと思います。あなた自身が足を運んだり、時間をかけて学んだりしたことは、きっとあなたがこれから世界の戦争問題を考えるときに、かけがえのない伴走者になってくれるはずです。戦争を考えることは皆さんの生き方を考えること、そして日本の今後を考えるときの材料にもなってくれるでしょう。時間があれば、ぜひ足を運んでみて下さい。

〈もっと学ぶ　戦争ミュージアムを知っていますか？〉

A　B　C　D　E

A　しょうけい館	（東京）	体に障害を負いながらも生きて帰ってこられた兵隊たち（傷痍軍人）の資料館です
B　昭和館	（東京）	昭和の戦前・戦中・戦後の資料を一括して展示している資料館です
C　東京大空襲・ミュージアム	（東京）	東京大空襲とは何だったのか、どのような影響を与えたのかを知れる資料館です
D　静岡平和資料センター	**（静岡市）**	**静岡市の空襲の被害と、県内の戦争にかかわる資料館です。セノバから近いので是非！**
E　無言館	（長野）	戦場へ行った美術学生たちの作品から、当時の空気感・希望が見えてくる美術館です

〈もっと学ぶ　戦争と映画・アニメーション〉

「火垂るの墓」

「風立ちぬ」

「この世界の片隅に」

「私は貝になりたい」

「野火」

「戦場のメリークリスマス」

「ひめゆりの塔」

「東京裁判」

「硫黄島からの手紙」

「父親たちの星条旗」

「ハクソー・リッジ」

３年生社会科通信‘22　第8号

2022/7/19

○壮絶な体験をしたとき、人はどのように乗り越えるか　～フランクルから～

皆さんには、授業でそして映像で「アウシュビッツ強制収容所」を見てもらいました。これはナチスが「社会的な貢献」として組織的・計画的にユダヤ人の虐殺をおこなった場所です。これ以外にも強制収容所とよばれる場所がいくつかあります。

では、終戦後その強制収容所で生き残った人たちは戦後をどのように過ごしていたのでしょうか？強制収容所を生き残った人たちは結構な数になりますが、ここでは一人の人物に着目したいと思います。ヴィクトール. E. フランクルという精神科医です。フランクルは、「夜と霧」や「それでも人生にイエスと言う」などの作品で、日本で知られています。

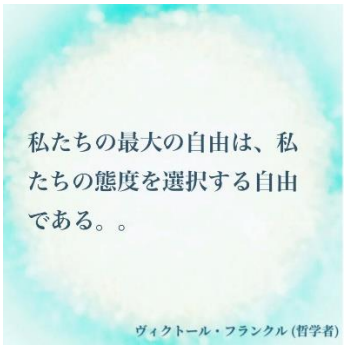
〈フランクルの経験〉

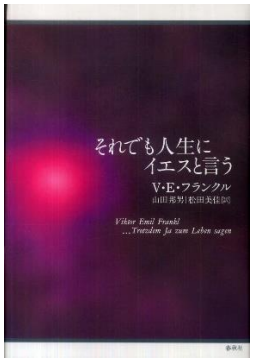
収容所に送られたフランクルは、その場で「アウシュビッツに着いた」ことを知ります。そこでナチスの兵隊によって振り分けられた後、シャワー室へ運ばれ、本物のシャワーを浴びることができました。しかし、別の集団に振り分けられた同胞たちは亡くなり、焼却炉で燃やされていることを知ります。また、１日に一回、パンの一切れとスープしかない食事でやせ衰えていく仲間たちを見て、フランクル自身も心が痛んでいきます。

しかし、彼には「書きかけの論文を完成させる」という強い使命感がありました。クリスマスの日に「家に帰れる」というデマが流れると、多くの同胞が期待しますが、それがかなわないと知ると息切れていきます。逆に、自分のやりたいこと・やり残したことがあるという人はこのような状況に左右されずに、自分の意志で動けるということをフランクルは見つけます。

それは、他の人にとってはどうでもいいようなこと、例えば「今日私がスープを飲むことで、母の寿命も１日伸びていく」という思い込みでさえも、自分のエネルギーになっていくということを発見したのです。

ストレスに打ち克つ必要はない、ただ「ありのままのあなた」をあなた自身が受け入れる。そして、あなたが本当にやりたかったこと、今やり残したことを実現させることを考えていく。そうすることで、あなたは自分の人生の主人公になり、自分の人生の意味を自分自身の手に取り戻すことができるでしょう。絶望や逆境に向き合ったとき、「本当にやりたかったことって何？」と自分に問い返してみてください。自分の心の底から、きっと答えが返ってくるはずです。





○アイヒマンという「凡人」

ユダヤ人虐殺の計画を立てた、アイヒマンという人物についても知っておいて欲しいと思います。皆さんは、あんなことを計画したのだから、この人個人がユダヤ人を嫌って、どうしようもなく殺戮したかったのだと思うでしょう。

しかし、彼は戦後の裁判で、「私は命令されたから、それを実行に移しただけだ」ということを繰り返し強調します。つまり、決定権はなかったのだから、自分も無罪だという発想です。アーレントという哲学者はこれを「悪の陳腐さ」と表現しています。

「みんなやってるんだから、私だけ責めなくてもいいじゃん」という発想のことですね。しかし、この発想は自分の罪を隠しながら、自分の意志すら消してしまうという恐ろしい一面をもっています。みなさんも、自ら「陳腐な人」として振る舞うことがないようにしていきたいですね。

○レジリエンスを身につける

1970 年代からナチスによる大量殺戮を息抜いた人たちの追跡調査がはじまりました。調査の結果、生き抜いたことを喜び、仕事につき、家庭を築き幸せに暮らしている人もいました。反面、生き抜いたことで自分の人生が狂わされてしまったと思い、毎日ふさぎこむような生活をしている人もいました。同じような経験をしているにも関わらず、どうしてそのような違いが出てくるのか。そこで生まれたのが「レジリエンス（逆境力）」という言葉です。スポーツをやっている人などは聞いたことがあるかも知れませんね。

レジリエンスとは、**失敗したり逆境に体面したときに、それを乗り越える力**のことです。人生を切り開いていくのは成功だとされていますが、ずっと成功を繰り返すことよりも、失敗をおそれず、逆境を乗り越えていくことがより重要だと、近年の研究で分かってきました。

では、レジリエンスはどのようにしたら身につけられるのでしょうか？

まず、直面する課題に対して過度に期待や不安を持ちすぎないという「感情のコントロール」が重要です。皆さんは、自分があいさつして相手に返事がなかったときにどう感じるでしょうか？　「なんで？」とか「嫌なやつだ」とか思う人もいるかも知れません。しかし、「もしかしたら、聞こえなかったかな？」「返す時間もないくらい集中していたかな？」など、相手の状況次第で変わることと分かっていれば、自分の感情も大きく揺れ動かないでしょう。こうした感情のコントロールができることが大事です。

次に、「安定した自尊感情」です。この自尊感情とは、「自分は偉大だ」とか「自分は誰よりも能力がある」という尊大な気持ちではなく、「まあ、やってみればどこまでできるかわかるし」とか、「できすぎることもないけど、やれないってほどでもないよね」という、自分の力量を安定して見積もれる感情をいいます。皆さんはバスケットのシュートを 100％入れないといけないと思いますか？　もちろん、プロでも入らないこともあるのだから、100％は無理ですよね。しかし、「シュート入れて！」と言われたときに「絶対に 100％決めないと！」と力んでしまう人がいます。自分に 100％決める力がないときには、その感情はただのプレッシャーになってしまいます。安定して「まあ、半分はいればいいかな」という安定した自尊感情が大事になります。

また、「自己効力感」も大切です。自己効力感とは、自分が相手に対してあるいは集団に対して貢献しているという意識をもつことです。みなさんが頑張っている係活動や委員会活動、そして部活動での役割などによって、自分が社会的にプラスの働きをしているという意識が育っていきます。こうした意識は、「もっと役立つために○○してみたい」「もっと○○したら楽しそう」というポジティブな感情を引き出してくれます。自分が、社会的に役立っているという経験はとても大切です。

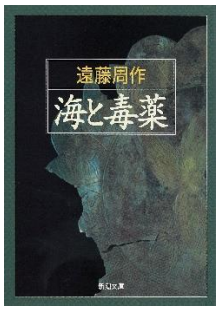
最後に、「楽観性」です。人の脳は、一度失敗した出来事を強烈に記憶に残そうとする傾向があります。しかし、「あのときはあのとき、今は違う」とか、「失敗したって、それもいい思い出になるさ」などの楽観的な感情は、ストレスや緊張を抑え、より安定した状態で生活するための大切な糧になります。

以上の 4 つが重要なキーになります。皆さんに「絶対に身につけて」というほどのものではありませんが、「これ知っていると、これが身についてると、生きやすくない？」という意味で提示しました。参考になった人はぜひ実践してみて下さい。

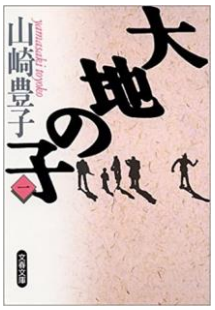
〈レジリエンスが高い人の特徴〉

- 考え方が多様
- 気持ちの切り替えがうまい
- 自分にも人にも優しい
- 周りの人と協力関係を築ける
- チャレンジを続ける
- 自分の良い面を認識している

〈もっと深める〉



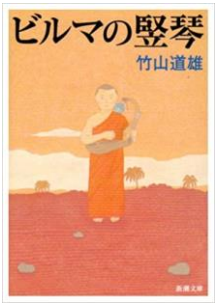
①



②

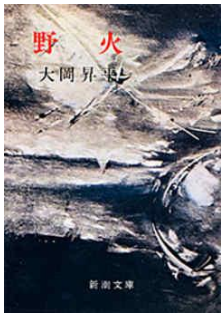
③

④



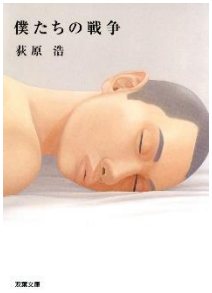
⑤

⑥



⑦

⑧



⑨

⑩

⑪

⑫

①遠藤周作「海と毒薬」:戦時下、日本を空襲していたアメリカ兵が撃墜されて、日本の捕虜となる。九州大学に勤める主人公は、この捕虜をつかった毒薬の人体実験を命じられるが…

②山崎豊子「大地の子」:　戦争で中国に取り残された、主人公たち、少年期は日本人であるが故に差別され、毛嫌いされる。大人になるにつれ祖国日本にたどり着くことを夢見るが…

③山崎豊子「二つの祖国」:　日本で生まれ、アメリカで育った日系人の主人公は、太平洋戦争の開始と共に収容所へ送られる。そこで聞かれたのは二つの祖国どちらを選ぶかという答えられない質問だった。主人公は戦後、東京裁判の通訳となるが…

④井伏鱒二「黒い雨」:　広島に原爆が落ちた…。主人公は運良く難を逃れるが、そこにまっていたのは放射能を含んだ煙を包んだ黒い雨だった。この雨に打たれた主人公は…。

⑤竹山道雄「ビルマの竪琴」:水島上等兵は竪琴を奏でることが得意だった。水島のいる部隊は音楽で団結し、たまたま唱っていたところを相手の部隊と遭遇します。終戦をしった水島は他の部隊に伝えていこうと出かけていきますが…。

⑥壺井栄「二十四の瞳」:　昭和初期、新任教員の主人公はある村に赴任する。そこで出会ったのは、新しい文化に興味津々の 12 人の子どもたち。主人公は子どもたちと心を通わせるが、やがて戦争の影に飲み込まれ…。

⑦大岡昇平「野火」:　兵士としてフィリピンへ出向いていった田村たちは、そこで凄惨な体験をする。食料がなくなり、部隊からもはぐれどうしようもない中、仲間から差し出された「猿の肉」を食すが、それは…。

⑧横山秀夫「出口のない海」:魚雷に人間が乗り込む特攻兵器「回転」に入った並木は、その操縦訓練中に、仲間が死んだことを知る。出撃する直前で、中止になり命拾いをした並木だったが…。

⑨荻原浩「僕たちの戦争」:顔がそっくりな　と　。二人は現代と戦時下で入れ替わってしまいますが、全く価値観の違う二人は、現代でも戦時下でも苦労することになり…。

⑩吉村昭「蚤と爆弾」:731 部隊に所属する曽根は、中国だけでなくアメリカやソ連との戦争も視野に入れ、早期の細菌兵器完成を目指していた。そのためには、生きた人間で実験することもいとわずと言う方針をとり…。

⑪秋草鶴次「17 歳の硫黄島」:飛行機に乗りたくて志願した航空隊で、飛行士ではなく、通信兵として硫黄島に派遣された。そこで経験したものはあらゆるものを燃やす死力の戦争だった…。

⑫高木俊朗「インパール」:牟田口中将率いる軍団は、イギリスに打撃を与えるために、インド領インパールを目指し行軍する。そこは豊かな植物が生い茂り、食料にも困らないとされていたが…。

集英社　戦争×シリーズ